

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第12号

News Letter

2012年3月25日発行



写真：活動地区の子どもたち



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

ラオスプロジェクトへの派遣と終了時評価

ISAPH事務局 磯 東一郎

今回のラオス派遣は平成23年10月18日～30日で、JICA草の根技術協力プロジェクト終了時評価に伴う報告書の取りまとめの支援及び27日に行われた評価会の準備が主な業務でした。

評価会では、これまでの活動実績とその成果である栄養・衛生教育での行動変容に加え、多発していたビタミンB1欠乏症による乳児死亡の大幅な減少や、更に困難とされていた食事タブーの改善にも少なからず成果がみられたことが高く評価されました。このプロジェクトは、活動対象のシーブンファン地区において、多くの乳幼児が栄養障害、不衛生な環境、生活習慣により命を落としていたことに端を発します。

栄養・衛生は、健康増進の基本となる部分で、文化、習慣、環境に深く関連しているため、健康教育を主軸とする改善には困難が伴うことはプロジェクト実施前から想定されていたので、プロジェクト前半は、対象となる母子が栄養・衛生向上のための基本を学び、認識を高めることを目標に、健康教育を実施しました。

健康教育では、分かりやすく、楽しく、興味がもてることを重視し、内容が画一的にならないようにカウンターパートと共に創意工夫し、住民参加型の健康教育を目指しました。プロジェクト後半では、最終目標である行動変容への具体的な取り組みとして、夫や舅姑などの年長者への健康教育の実施を行いました。栄養改善の障害となる食事タブー・迷信を家庭内で権限がある夫や舅姑が守っていれば、母親に影響を与える



終了時評価会の様子

からです。

この結果、対象地区の住民の栄養・衛生の知識並びに認識が向上し、行動変容を促し、更に乳児の低体重児の減少（2009年23%から2011年9%）、ビタミンB1欠乏による乳児死亡の減少（母親のビタミンB1摂取の向上）などに成果として表れました。特に、改善が困難と考えていた食事タブーや迷信にも、少なからず改善が見られたことの意義は大きいと考えます。一方、食生活の改善については、対象住民の貧困や食材の供給の問題から完全な行動変容には至っていないケースも多いことが今回の最終調査で明らかになり、健康教育を主軸としたアプローチの限界が感じられました。

今後の課題としては、健康教育に加え住民が自給可能な家庭菜園や昆虫の養殖の導入なども必要になってくると思います。

ソロプチミスト日本財団の国内・国際奉仕賞を授与

ISAPH事務局

ISAPHは、平成24年2月16日、国際ソロプチミスト久留米よりソロプチミスト日本財団の国内・国際奉仕賞を授与いたしました。この賞は、ISAPHが実施している国際協力、特にラオス国での母子保健活動が高く評価されたことによるものです。

受賞者は7組で、うち高校生2団体3組、中学生1団体1組、社会人2組、法人1組で、高校生2組と中学生1組は東日本大震災後の募金活動、社会人2組は長期にわたる高齢者の支援と中国人への技術指導が高く評価されての授与でした。受賞式には聖マ

リア病院国際事業部所属でISAPHアドバイザーの山崎裕章氏が出席しました。式典後に懇親会が開かれ、この場でラオスの活動内容、特にビタミンB1欠乏による乳児の死亡とその対応、また今後のマラウイ国での活動計画について説明を行い、関係者の支援とご協力をお願いしました。



ラオスにおける保健医療 国際協力報告会開催について

ISAPH事務局 齋藤 智子

平成20年12月より開始したJICA草の根技術協力事業「生き生き健康村づくりプロジェクト」が昨年12月23日で終了することから、その報告会を平成23年12月9日に開催しました。多くの方が参加できるよう、聖マリア学院大学にて午後6時からの開始としました。

発表はNPO法人ISAPH齋藤智子によるJICA草の根プロジェクトの成果を中心とした「生き生き健康村づくりプロジェクト活動報告と今後の展望」を始めとして、また同プロジェクトの課題である寄生虫対策に関しては、聖マリア病院国際事業部山崎裕章氏による「プロジェクト対象地域での腸管寄生虫感染の現状と課題」を、さらに同じラオスで活動を行っているNPOじゃっど理事長小幡順子氏による「じゃっどにおけるラオスでの保健教育活動」の3者によるものでした。報告会の最後に、ISAPHが寄付をいただいている「iサイクルプロジェクト」について、聖マリア病院医師坂西信平氏から報告されました。

当日はJICA九州国際センターを始め、聖マリア病院



報告会の様子

はもとより一般からも60名と多くの参加がありました。参加者へのアンケートによると「国際協力に興味・関心があるため」が参加理由としては多く、報告会へのコメントでは、「ラオスという国やISAPHの活動を知ることができてよかった」、「今後、活動に協力したい」、さらに、「現地の慣習などを理解し、主体は現地であるということ」を常に考え活動することが大切である」との貴重なご意見をいただきました。これらのご意見を今後の活動に活かしていきたいと思います。

今後ともISAPHへのご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ラオス派遣

ISAPH事務局 楨村 さおり

平成23年12月8日～18日の11日間ラオスへ派遣されました。これはJICA草の根技術協力事業のプロジェクト管理の専門家派遣で、本来聖マリア病院の杉本次長が予定されていましたが、業務で日程の都合がつかなかったため、代理の派遣となりました。

現地では11月に活動の最終評価が終了し、残るは財務処理と報告書提出で、今回の派遣ではこれらの確認、指導作業を行いました。また、聖マリア病院群初期臨床プログラム「国際保健コース」研修と時期が重なったため、現地視察や活動視察は一緒に行うことになりました。ラオスのJICA草の根プロジェクト開始時から携わってきましたが、ラオスへはこれが初めてだったため、耳ではすっかり馴染みになっていた場所、人

などに今回初めて行く（会う）ことができ、想像との違いに驚くことしきりでした。

12月は乾季であるため砂埃がすごいと聞いていましたが、活動地域へ向かうトラックの荷台で被った砂埃は掛けていた眼鏡の内側にも積もるほどで、顔も頭髮（フード着用）も茶色になり、周りから「20年後の姿だね」と言われるありさまでした。手も石鹸で2度洗っても桶の水が濁ってしまったり、行きに着用していたマスクは帰りには使用不可能になってしまったりと、現地スタッフの大変さが身をもって感じられました。やはり百聞は一見に如かずだと改めて実感した今回のラオス派遣でした。

今年3月をもって退職いたします。今までありがとうございました。



砂埃にまみれて

アイ Iサイクルプロジェクト活動報告



ISAPH事務局

平成23年9月後半～12月までのペットボトルキャップ収益としてiサイクルプロジェクトより17,029円（キャップ340,572個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

平成23年12月9日～16日で、聖マリア病院臨床研修プログラム「国際保健コース」のフィールド研修の受け入れを致しました。参加者は4名（引率1名含む）でした。

臨床研修医「国際保健コース」 ラオス研修に参加して

2年次初期研修医 三浦 聖史

私は、途上国が好きであること、今後内科医として臨床研究や地域医療を行う時に患者を個人ではなく集団として考える姿勢が必要とされることなどから、国際保健コースを選択しました。ラオス渡航前にはまずは英会話、そして文章構成の考え方や計画立案のためのPCM（Project Cycle Management）手法など、海外支援を行う際に必要なロジックを学びました。

われわれの研修先となった聖マリアグループが支援しているNPO法人であるISAPHは、2005年よりラオス国カムアン県において母子保健プロジェクトを行っており、特にビタミンB1欠乏症による乳児死亡の減少などで成果を上げてきています。実際われわれが訪問した集落でも健康衛生教育の効果を目の当たりにすることになりました。

ただ同時に、貧困、教育水準の低さ、住民の認識の甘さ、地理的限界など、途上国特有の打開することの難しい問題点が数多く存在することも痛感しました。しかし、そのような問題が存在する上でプロジェクトを遂行するために必要な点が正確なロジック、科学性であり、それこそが公衆衛生、海外支援の醍醐味であるとも感じました。

私は来年度からは脳血管内科医として勤務することが決まっております、しばらくは目の前の患者を診ることで精一杯になると思いますが、全体を俯瞰し、患者を集団として観察することができる段階になった時に、今回の研修で学んだことを思い出そうと思います。

最後に、このような貴重な機会をいただき、浦部先生をはじめ聖マリア病院の先生方、ISAPHの職員の方々には心よりお礼申し上げます。



ISAPH ラオス事務所で研修の様子

国際保健コースを経て学んだこと

2年次初期研修医 日野 知仁

今回、私は聖マリア病院「国際保健コース」の一環でラオスにおけるISAPHのスタディツアーに参加させていただきました。私はラオスに行くのは初めてでしたが、空港周辺にはビルがありラオスに到着した時、意外と都会だなという印象を受けました。しかし、車で20分ほど走ると雰囲気が全く変わり、砂ぼこりの舞う道、道路を横切る牛、質素な家という様子に、自分がある場所は開発途上国ラオスなのだと再認識させられました。

そして、私たちが宿泊していたタケク（首都ビエンチャンから車で5時間）から、さらに車で1時間程走ったところに活動地域の村がありました。村の周囲は当然、道路の舗装などなく、家もかなり質素でした。また家畜と人間が生活環境を共有しているため、豚や犬や鶏が村を歩き回り、村の中は糞だらけという状況で、日本では見たことのない様子には私は大変驚きました。

私は今回ラオスを訪れる前に、5歳未満の児童における栄養問題と寄生虫の関連について調べていました。スタディツアーでは、村人の生活を視察し、寄生虫の

認識を調査することが目的だったので、5歳未満の子どもを持つ村人の家を訪れ母親から話を聞いて回りました。私が訪れた村は最初手洗いの習慣さえなかった村ですが、今回訪れてみると、ISAPHの活動の成果もあり、手洗いは当然、食習慣において魚を生食しないなど寄生虫対策を行っており、衛生教育の重要性を改めて感じました。しかし、水の煮沸が徹底できていないこと、使用している井戸が浅井戸と不衛生であり、生活環境が整っていないことなど、さまざまな問題点を認め、今後もISAPHのような援助活動の必要性を感じました。

最後に、私は子どもが大変好きなので、子どもの様子を見る機会が多かったのですが、村の子どもたちは非常に明るく笑っていました。しかし、ラオスにおける5歳未満の低体重児の割合は40%といわれています。一人でも多くの子どもが笑っていられるように今後も何らかの形で国際保健に携わっていきたいと思いました。



カンパータイ地区ケンパー村で、食べ物と栄養について学ぶ子どもたち

ラオス国スタディツアーを終えて

2年次初期研修医 樋口 淳也

われわれは今回、国際保健研修の一環としてラオスでの実地研修に行っていました。内容としては、事前にラオスの現状と国際保健活動を行うにあたっての公衆衛生的介入法を学び、現地で実際の保健医療情勢を確認したのちにプロジェクト立案を行うというものです。

ラオスはベトナム、中国、ミャンマー、タイ、カンボジアの5カ国に囲まれた東南アジア唯一の内陸国です。周辺国と比べても経済的に恵まれず東南アジア最貧国の一つであり、保健医療分野においても多くの問題を抱えています。こうした実態を踏まえ、われわれもいくつかのテーマを持って研修を行いました。

私はISAPHが活動しているカムアン県セバンファイ郡において栄養問題に関する調査を行いました。ラオスの5歳未満児死亡率は出生1,000人あたり59人と日本の約12倍と高率です。その死因の半数を下痢症や呼吸器感染症が占めていますが、これには5歳未満の栄養不良児の割合が40%と高いことが背景として

深く関与しています。つまり健康体を得るために、栄養状態を良好に保つことは必要不可欠なのです。しかし、一口に栄養問題といっても、そこには食糧不足・食習慣の問題・衛生面の問題など様々な要素を含んでいます。

これを受け、ISAPHは2005年から同郡において郡保健局や各村長らと共に、巡回診療や栄養・衛生についての健康教育、井戸の設置活動などの活動を行ってきました。この活動は着実に実を結びつつあり、同地域の乳幼児死亡率は減少に向かっています。今回調査を行った村の各家庭においても、食習慣や衛生行動の改善が認められ、その効果が伺われました。

今回、実際に現地に行くことで、手段・言語・習慣を始めとし様々な問題があることが分かりました。そういう意味でも非常に有意義な研修であり、機会があれば是非国際協力の現場に出たいと思いました。スタディツアーに関わっていただいた全ての方に感謝致します。



実際の聞き取り調査風景

マラウイ報告

マラウイでの新事業計画に向けて

ISAPH事務局

ISAPHは、今回マラウイにおける新事業計画として、栄養教育、衛生教育、食事指導などの活動を主とした北部ムジンバ県ムジンゲ村の乳幼児の栄養状態改善を目的とした「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」計画を作成、これをJICA草の根技術協力プロジェクトの提案書とし、昨年12月22日にJICAに事業の申請を行いました。

当法人は、平成6年～11年の聖マリア病院国際事業部によるJICAマラウイ公衆衛生プロジェクトを引き継ぎ、ムジンバ県で支援を続けていましたが、今回この地域で新たな事業の実施を計画し、昨年8月にISAPH理事（聖マリア病院国際事業部）の浦部大策氏とISAPHアドバイザー（同国際事業部）の山崎裕章氏によりマラウイ北部を中心に視察を実施。マラウイでは、以前より子どもたちのさまざまなタイプの栄養障害が問題となっていました。この視察から、ムジンゲ村

でも例外ではなく食物摂取量の不足や栄養バランス不良により引き起こされていること、また、母親にも適切な離乳食や子どもの食事栄養のバランスについての認識がないことが示唆され、これを改善するためのプロジェクトを立案しました。

採否の結果については4月に発表の予定です。



調査で訪問した家族



ラオスからの報告

ラオス赴任挨拶

ISAPHラオス 岩本 英治

ISAPHラオス事務所長として、平成23年11月27日に着任致しました岩本英治です。これまでに国際保健医療協力活動にて確実な成果を上げてきたISAPH事業に携わることができ、大変嬉しく思っております。

今回は2回目のラオス滞在となります。最初は建設に従事した平成7年～15年でした。ビエンチャン・ワッタイ国際空港及びセタティラート病院の工事に携わりました。今回2度目のラオス赴任で、ワッタイ空港に降り立ったときにはこみ上げてくる懐かしさに感動し、ビエンチャンの町並みを歩くにつけ昔に比べあまりの変化に驚きを隠し得ませんでした。

さて、我々の活動地区であるカムアン県タケクの南に位置するセバンファイ郡の3地区は少数民族も入り交じっており、古い因習に囚われて健康を害する人が少なくないようです。とりわけ妊産婦・母子の健康状

態に問題が多いと聞いております。今現在においては、私自身全てを把握できておりませんが、これまでプロジェクトⅠ期、Ⅱ期とISAPHが確実に成果を上げてきている妊産婦・母子の健康管理活動を今後も継続し、少しでもこの地区の人々、ひいてはラオスの人々の生活向上に貢献できるよう頑張る所存でございます。

皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



健康教育のため作成したTシャツを持って

待つ医療から訪ねる医療活動を経験して

ISAPHラオス 岩田 和子

平成23年12月末で、3年8カ月にわたるISAPHラオス事務所の勤務を終了致しました。

今回の派遣以前にも、ラオスの首都近郊にある総合病院で看護管理や看護技術に関する支援活動をしていました。そこでは、時々地方からもう手遅れであるような重態の患者さんが運び込まれてくることもあり、「何故もっと早く来てくれなかったのか」と思っていました。しかし、ISAPHの活動の場であるモバイルクリニックで農村を回りだしてから初めてラオスにおける地方の現状というものを知った気がします。

まず、経済。ラオス国民のほとんどは農業に従事していますが、それはほとんど自給自足のためのもので、利益を得るほどの農家はあまりありません。つまり現

金収入がないのです。医療保険制度も整っていないため、地方の農民は現金で医療を受けることが大変難しいのです。

次にインフラ。病院のある場所は限られており、ほとんどは大きな道路の近くにありますが、しかし、農村住民は舗装のない道を何kmも奥に入ったところに住んでいて、交通の手段は主に徒歩やバイクです。雨季には泥がぬかるみ歩行さえ困難です。電気や水道、トイレが完備されているところは、県庁所在地以外ではあまりありません。こういった状況では、病院にすぐに来られないし、農業を休んで病人を看病するのも大変なのです。

教育についても、農村においては学校数が限られ、教師の確保も大変です。子どもは農業や子守りを手伝うため、中学校以上の教育を受けるのが難しい状況です。このため、保健医療や衛生に関する知識を正しく受け入れてもらうことがなかなかできません。文字が読めない人もあり、パンフレットを配布しても内容を理解できない人もいます。さらに、昔からラオスに伝わる習慣を守る風潮もあり、健康に良くないと分かっているてもやめられないこともあるのです。

医療の他にも多くの要素が絡み合い、地方住民の健康保持、増進はまだまだ茨の道のりです。一人でも死ななくてすむ人を死なせたくない。一人でも多くの方が病気で苦しむことなく生きてほしいと願い、ISAPH職員、日本人専門家の皆さんや他団体の協力を得て、ラオスの皆さんと共に頑張ってきました。この数年間で5歳未満の乳幼児死亡者の減少が見られたことは本



郡保健局での送別会

当に嬉しかったです。

病院で待っているだけでは、ラオスの地方で医療を必要としている人々に直接届かないということや、病気になるような健康づくりを、お金をかけない健康教育という形の医療サービスで提供することの重要性をここで学びました。ISAPHを離れますが、私はこれからもラオスの皆さんのお役に立てることをしていきたいと思っております。長い間、ご支援やご指導をいただき、まことにありがとうございました。心より厚くお礼を申し上げます。



粉ミルク支援で育っている双子（iサイクルなどの寄付金により支援）

健康教育Tシャツ作成・配布しました

ISAPH ラオス ^{はんだう} 榎 清美

平成23年12月と今年2月のシーブンフアン地区定期活動時に、健康教育の内容を簡単なメッセージと絵で表現したTシャツを健康教育参加者へ配布しました。Tシャツのデザインは、①妊産婦の栄養（黄色）、②母乳栄養（ピンク色）、③5歳未満児の栄養（赤色）、④飲み水（水色）、⑤手洗い（青色）についての5種類です。

対象者の中には、字も読めない妊婦や母親も含まれているため、絵を見れば健康教育の内容を理解するこ



配布したTシャツを着用して記念撮影！

とができるようTシャツを作成しました。健康教育実施時には、これらのTシャツを用いて、字の読める母親たちにはメッセージを読んでもらい、字の読めない母親たちには絵の意味を説明してもらい、すべての対象者が内容を理解できるよう工夫しながら健康教育を行いました。

今後も郡保健局職員と創意・工夫をしながら、対象者全員が健康教育内容を簡単に理解できるような新しい健康教育教材の作成を行っていこうと思っています。

最後になりましたが、今回のTシャツ作成のため絵を書いてくださった本間美和子氏に心から深謝いたします。



郡保健局職員による健康教育実施風景

ナショナルスタッフ紹介

ISAPH ラオス

カムラン・カンタペンサイ

私は、カムラン・カンタペンサイ、1972年7月10日生まれの39歳です。2008年10月1日からISAPHプロジェクトで運転手として働いています。

ISAPHプロジェクトは、田舎に住んでいる貧しい人々への支援を行っています。そのことによって母子や住民の健康状態が以前より改善されており、私はISAPHで働いている事をたいへん嬉しく思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



最近のできごと

2011年10月～2012年2月

- 10月18日～29日 ISAPH事務局磯がJICA草の根事業最終評価及び準備のためラオスに派遣
- 10月23日～29日 聖マリア病院国際事業部浦部部長がJICA草の根事業最終評価及び準備のためラオスに派遣
- 10月20日・21日 青年海外協力隊4名活動視察受け入れ
- 10月26日・27日 JICA草の根事業最終評価会議実施
- 12月 6日 青年海外協力隊1名及び協力隊カウンターパート3名研修受け入れ
- 12月 7日・8日 青年海外協力隊3名活動視察受け入れ
- 12月 9日 聖マリア学院にて「ラオスにおける保健医療国際協力報告会」開催
- 12月 9日～16日 ISAPH事務局榎村草の根事業専門家派遣のためラオスに派遣
- 12月14日 MOU3に関する会議実施
- 12月12日～16日 聖マリア病院臨床研修プログラム「国際保健コース」のフィールド研修4名受け入れ
- 12月22日 JICAにマラウイにおける草の根事業の提案書「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」を提出
- 12月27日 在ベトナム大使館職員1名活動視察受け入れ
- 1月10日 山梨ラオス友好協会から古着3箱寄付
- 2月 活動計画（2012年～2014年）に関する会議実施
- 2月16日 国際ソロプチミスト久留米にて受賞式参加
- 2月20日 ラオスにて母子保健プロジェクトのMOU3調印式
- 2月21日 ラオスにて母子保健プロジェクトのMOU3報告会



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 入会金：30,000円 年会費：30,000円

一般会員 入会金：3,000円 年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH 東京事務所

〒105-0004

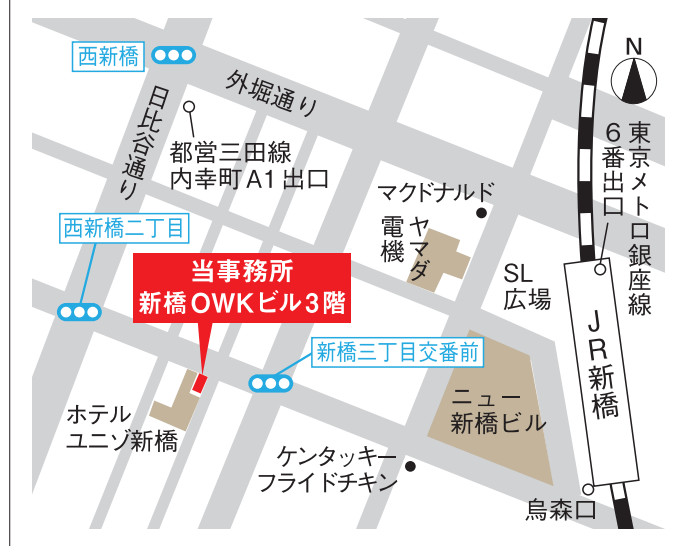
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階

TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

東京事務所案内図



【ISAPHニュースレター 第12号 編集スタッフ】

榎村 さおり／磯 東一郎

ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	湯川 武	早稲田大学大学院教授
理 事	樋口 敬記	梓設計九州支社特別顧問
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
監 事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.5.0）

- 総合周産期母子医療センター（NICU・MFICU）
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 15189 認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力を頂いています。